



てきすとぽい杯

VOL

11

<http://text-poi.net/>

目次

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第11回 募集要項

第11回 審査結果

入賞作品紹介

《大賞》

『AMY』 豆ヒヨコ 獲得☆ 4.300

《入賞》

〈「首」賞〉

『首畑』 小伏史央（旧・丁史ウイナ） 獲得☆ 4.200

『ライフログハックな彼女たち』 犬子蓮木 獲得☆ 4.200

『娘と林檎（仮）』 永坂暖日 獲得☆ 4.200

〈候補作品〉 ※得票順

『スノーホワイトは赤い林檎を好む』 晴海まどか 獲得☆ 4.100

〈「林檎」賞〉

『齧る』 茶屋 獲得☆ 4.000

『実に、ささやかな』 志菜 獲得☆ 3.800

『林檎と彼女』 orksrzy 獲得☆ 3.600

『電子レンジ』 ひこ・ひこたろう 獲得☆ 3.583

『不完全な首長竜の死』 Wheelie 獲得☆ 3.455

『切る』 茶屋 獲得☆ 3.455

『祖母の庭』 栗田柚香 獲得☆ 3.400

〈弘法は筆を選ばず賞〉

『大都会』 碧 獲得☆ 3.333

『寒い荒野と発掘と』 うわあああああ 獲得☆ 3.182

<番外作品> ※投稿順

『間に合わなかった。』 秋吉君 獲得☆ 3.545 (制限時間後に投稿)

終わりに

終わりに

てきすとぼい広告

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第11回てきすとぽい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/37/>

お題 : 三題 「首」「霜」(事前公開) 「林檎」(当日発表)

これらの言葉を、タイトルまたは本文で使用してください。

投稿期間 : 2013年11月16日22:30 ~ 同日23:45

審査期間 : 2013年11月17日0:00 ~ 2013年11月24日24:00

投稿期間中のTwitterまとめ : <http://togetter.com/li/591048>

第 11 回は、三つのお題のうち二つを事前公開、残る一つを当日開始時刻に発表しての開催でしたが、初参加の作家さんお二人を含む、計 15 作品をお寄せいただきました。

また、事前公開の二題「首」「霜」は、[第 10 回ぽい杯スピンオフ賞](http://togetter.com/li/586833)の覇者である碧さんがご考案くださいました（お題決定までの経緯：<http://togetter.com/li/586833>）。

第 11 回募集要項

【投稿について】

投稿期間：

11 月 16 日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の中に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、三題のうち二題を事前公開、残る一題を当日開始時刻に、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/37/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

11 月 17 日（日）0 時 ～ 11 月 24 日（日）24 時

審査方法は☆5 段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降 3 作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第 11 回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1 位 ☆ 4.300

『AMY』 豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/37/9/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:37 最終更新: 2013.11.16 23:44

総文字数 : 2413 字

2 位 ☆ 4.200

『首畑』 小伏史央 (旧・丁史ウイナ)

<http://text-poi.net/vote/37/3/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:12 最終更新: 2013.11.16 23:31

総文字数 : 1352 字

2 位 ☆ 4.200

『ライフログハックな彼女たち』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/37/5/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:29 最終更新: 2013.11.16 23:31

総文字数 : 2248 字

2 位 ☆ 4.200

『娘と林檎 (仮)』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/37/13/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:44

総文字数 : 3452 字

5 位 ☆ 4.100

『スノーホワイトは赤い林檎を好む』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/37/10/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:41 最終更新: 2013.11.16 23:44

総文字数 : 3636 字

6 位 ☆ 4.000

『齧る』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/37/2/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:09

総文字数：905 字

7位 ☆ 3.800

『実に、ささやかな』 志菜

<http://text-poi.net/vote/37/12/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:43 最終更新: 2013.11.16 23:53

総文字数：899 字

8位 ☆ 3.600

『林檎と彼女』 orksrzy

<http://text-poi.net/vote/37/14/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:45

総文字数：2605 字

9位 ☆ 3.583

『電子レンジ』 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/37/1/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:05 最終更新: 2013.11.16 23:09

総文字数：2033 字

(番外) ☆ 3.545

『間に合わなかった。』 秋吉君

<http://text-poi.net/vote/37/15/>

投稿時刻: 2013.11.17 01:45

総文字数：970 字

10位 ☆ 3.455

『不完全な首長竜の死』 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/37/7/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:33

総文字数：236 字

10位 ☆ 3.455

『切る』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/37/8/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:36

総文字数：971 字

12位 ☆ 3.400

『祖母の庭』 栗田柚香

<http://text-poi.net/vote/37/6/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:32

総文字数 : 2576 字

13 位 ☆ 3.333

『大都会』 碧

<http://text-poi.net/vote/37/11/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:42

総文字数 : 737 字

14 位 ☆ 3.182

『寒い荒野と発掘と』 うわああああああ

<http://text-poi.net/vote/37/4/>

投稿時刻: 2013.11.16 23:25

総文字数 : 1665 字

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/37/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 4.300

『AMY』

<http://text-poi.net/vote/37/9/>

著：豆ヒヨコ

少女の名は、AMY。その冷えた手で、砂の中からすくい集める「宝石」のように
きらきらと光る少女の心と、彼女のように光を見出だせずにいる主人公――
二人の不思議な交流を描いたこの作品が、第 11 回の接戦を制し、大賞を獲得しました！
幸福とは、強さとは何なのか、答えのない問いを強く訴えかける作品です。

《入賞 3 作品》

獲得☆ 4.200

『首畑』

<http://text-poi.net/vote/37/3/>

著：小伏史央（旧・丁史ウイナ）

畑一面に育った、首たち。収穫のその日まで、大事に大事に、世話をする。
けれど、そんな首畑の栽培を邪魔する者たちがいて……？
長閑さと不気味さがシュールに入り混じる、いとも風変わりな首畑の物語です。

獲得☆ 4.200

『ライフログハックな彼女たち』

<http://text-poi.net/vote/37/5/>

著：犬子蓮木

この頃なぜか、ブログに書いた覚えのない話をツイッターなんかで指摘される。
読み返すと、実際の出来事を微妙に塗り替えたような記事がいくつも出てきて――いったい、誰が!?
SNS 利用者ならゾクリとせずにはいられない、今にも現実を起こりそうなサイバーサスペンスです。

獲得☆ 4.200

『娘と林檎（仮）』

<http://text-poi.net/vote/37/13/>

著：永坂暖日

王家に不老長寿をもたらすという、神水。“巫女狩り”の手によって多くの神水が失われた今、病に伏せる王は、妃は、その娘や、王に仕える者らは、何を思い、何を目論むのか。権力と因縁が生み出した、歪んだ愛憎の行く末は……？神水を巡る物語、第10回の続編です。

《特別賞》

《「首」賞》

『首畑』

<http://text-poi.net/vote/37/3/>

著：小伏史央（旧・丁史ウイナ）

首の存在感、質感、味わいを、最も鮮明に感じさせる、まさに首一色の作品でした。
第11回入賞とのダブル受賞となります！

《「林檎」賞》

『齧る』

<http://text-poi.net/vote/37/2/>

著：茶屋

古今東西、世界を動かしてきた林檎を巡って、時空を渡り歩くような周遊感のある作品でした。

《弘法は筆を選ばず賞》

『大都会』

<http://text-poi.net/vote/37/11/>

著：碧

出先の、回線も機器も不確実な環境で、なんと Kindle によって執筆・投稿された作品でした。

——受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

投稿時刻 : 2013.11.16 23:37

最終更新 : 2013.11.16 23:44

総文字数 : 2413 字

獲得☆ 4.300

《大賞受賞作品》

AMY

豆ヒヨコ

AMYは砂場の砂をひとつかみ取り、さらさらと指の間から零す。慎重に、ていねいに塵芥をふるう。何度か繰り返す。すると、細かなガラス質のかけらたちが、僅かばかり彼女の手のひらに残る。

AMYは、それを『宝石』と呼んでいる。

「ねえ、AMY」

私は砂場をぐるりと囲む、錆びた鉄製の柵に腰かけていた。震える両腕をこすりながら、つい諭してしまう。

「風邪をひいて死んじゃうわ、あなたも私も。諦めて家で暖まるべきよ。なんでも努力すればいい、ってもんじゃない」

AMYはきょとんと眼を見張ったのち、脈絡なく弾けるように笑う。

「素敵な宝石がほしいの」

私をこそ諭すように、彼女はゆっくり、ひとつひとつ区切って発音した。

「とっても素敵なのをね。クラスの皆が持っていないような、とても輝くのを」

私は大きなため息をつく。吐きだされた心配が、白い湯気となってあたりに漂う。

十二月を迎え、夜の公園はひどく冷え込んだ。明日の朝は霜が降りるに違いない。しかし十歳のAMYは、少しも気にしないのだった。ひとり母親の帰宅を待っている。真っ暗な砂場で、真夏の熱帯夜と変わらず、ニコニコご機嫌で。深夜まで皿洗いをする、フィリピーナの母親を迎えるために。

「まりこ」

鈴のように陽気な声で、AMYは私の名を呼んだ。

「どうしてそんなことを言うの？ 努力するな、なんて？」

月明かりに、南方の人特有のすべらかな肌が艶めく。彼女の目は本当に澄んでいる。

私は答えかけ、うまく言えず、仕方なく笑いで紛らせた。

AMYの真似をして、目の前の砂をすこし掬い上げた。10gほどのはずの白い砂は冷たく湿り、思いのほか持ち重りがした。かすかに左右に揺らすと、糸のようにさらさらと零れていくのが上から見えた。それは脳髄を麻痺させるエクスタシーで、私はしばし感触を楽しんだ。

「気持ちがいいのね」

驚きを含んだ声で言うと、AMYは得意げに胸を張った。

「もちろんよ。エステみたいでしょ」

彼女は私の横にちょこんと座り、またも砂をふるう作業に没頭し始める。

指の先が凍りそうに冷える夜気だというのに、AMYは長袖のTシャツ一枚だった。かろうじて十分丈のウェットパンツは薄いナイロン素材で、小麦色の裸足にはビーズをあしらった安っぽいヒールサンダルを履いている。無造作に伸びたロングヘアはくるくると巻き、黒ずんで汚れた首筋に、ツタのように絡みついた。放り出された林檎柄のトートバッグから、傷だらけの古い携帯電話がはみ出し砂にまみれていた。

さっき口にしようとして、すぐに諦めてしまった言葉。

「あなたが好きだから、愛しいから、絶対に傷ついてほしくないから」

恥ずかしくて、へんに勘ぐられたくなくて、とても言えなかった。私たちは血さえ繋がっていない、ましてや親子でもない、ただの知り合いだ。理解してもらえないはずもない気がした。

以前バイトしていたスーパーからの帰り――まさにクビになった日だ――この公園で、はじめてAMYを見かけた。天啓のように、私と同じ生き物がいる、と思った。期待されないこと、興味を持たれないこと。それは取りも直さず、ほぼ生きていないということだ。

例えば私。

コミュニケーション能力がなく、社会のお荷物で、アルバイトさえ転々とするフリーター。親からも見放された愚図で下らない娘。同棲相手はゲーム廃人のろくでなし。恫喝されるばかりで萎縮するばかりの人生。でも、かまわないと思っていた。もう何も望まない、とうの昔に決めていた。その代わり、私は誰からも努力を強いられない。私は、空白のような自由をふんだんに持っている。

毎夜、つめたい布団の中で、自分に延々そう言い聞かせている。

AMYに会うと、自分まで愛しくなった。なぜか。

そして哀れに思い、最後に激しく憎らしくなった。「私のように育ててほしくない」と願い、一方で、「私と同じ泥の中へ引きずり込みたい」という衝動に混乱させられた。誰だって独りは寂しい。けれど私にも矜持はある。人として外れたことはしたくない、出来損ないだからこそ、その思いは人一倍なのだ。

だから、もう会わなければいい。会うべきじゃない。

そう思うのに、気づけば夜の公園に向かってしまうのだった。自分が、よく分からなかった。

ふいに肩を叩かれ、はっと目を上げる。

「これあげる」

AMYは目をほころばせ、私の左手を開かせて、何かをぽとりと落とした。

ごく小さな煌めきがあった。波で洗われ削られた、おそらくビール瓶の一部だった。海で生まれたものに違いない。誰が拾って持ってきたのか、街中の砂場にあるはずもない物質だ。それは三センチほどの大きさで、耳のかたちをしている。上品な薄茶色の、美しい擦りガラスだった。

私は思わず感嘆してしまう。

「なんて綺麗なの」

もらえないわと辞退したが、AMYは首をぶんぶん横に振った。

「これは、私が探している宝石ではなくて」

人差し指を天に向け、太陽のようににっこり笑う。

「ミラクルよ」

ふいに、中年女の呼び声がした。フィリピーナだ。

酒に枯れた、怒りに満ちた響き。ひゅっと AMY は肩を竦める。あかるく優しい笑顔は引っ込められ、鼠のように卑屈な光が瞳に宿る。それでも彼女は言いつのる。

「探せばあるわ、何だって」

私は、掌のガラス質をそっと転がす。心地よい滑らかさと、細かなざらつきが皮膚に伝わる。

AMY は勇気をもって、少しずつ肩をもとに戻す。私はなおもガラスを味わう。しかしヒステリックな叫びは繰り返された。AMY！ はやくでてきなさい、言うこと聞かなきゃ…… AMY！ 少女は、今度は果敢に笑ってみせる。すこしだけ、舌さえ出して見せる。

私は畏敬の念を抱く。その強さに、健全さに、まっすぐな心根に。おかえしに、おどけて肩をすくめてみせる。

私たちは笑う。

声が止んだりはしない。それでも、歩くのを止めたりはしない。決めているのだ。たとえ誰も、私たちの気配に気がつかないとしても。このガラスみたいに。

A —— MY ——！

投稿時刻 : 2013.11.16 23:12

最終更新 : 2013.11.16 23:31

総文字数 : 1352 字

獲得☆ 4.200

《入賞作品》

《特別賞・「首」賞》

首畑

小伏史央（旧・丁史ウイナ）

一面の首が、生えている。

鼻歌を歌いながら、首に水やり。土を踏みしめる。足音がかなでる香りは、首たちの吐き出す甘くまるやかな声だった。首たちが気持ち良さそうに水分を吸収する。あー、あー。首たちの発する声に、わたしは一層鼻歌を強くした。

収穫時まで、もうすぐよ。

ああ、もうすぐ。たのしみだなあ。

ひとりだけのハミング。でも、わたしはひとりぼっちじゃない。だってまだ収穫されていないのだから。畑を見渡す。数え切れない首が、規則正しく四方に並び、あーあーと香りの良い声を出している。でも。

畑の向こうから、誰かが覗いているのを、わたしは見つけた。また見つかった。ほんとに、しつこい。

誰かは、わたしの視線に気付くと、慌てて逃げていった。どんな人だったのかは、よく分からない。でも、間違いなくこの畑のことを良く思っていない連中だろう。

あー。あー。

今日の仕事はとりあえず、ここまで。首たちを眺めながら、わたしは考える。あいつらについては、明日、対策を講じよう。

しゃがんで空を仰ぐと、遠い視界は雲ひとつない快晴で、まるでこの土地を見守っているようだった。満足して、首たちに視界を戻す。首がわたしの人差し指を食べていた。

翌朝。寝ぼけまなこで今日もお仕事。人差し指で目をこする。問題なく指は再生していた。

畑に着く。わたしは愕然とした。

霜が降っている！

わたしは畑のなかに駆けた。全面、白く模様がかっていた。

あいつらがやったんだ。

きっと気温をいじったんだ。

膝をつく。首たちは苦しそうで、声にも臭気が混じっていた。

せっかく長い時間をかけて、いままで育ててきたのに。

おねがい。元気になって。

おねがい。

そばでまぶたをおろしている首に、わたしは手を差し出した。

食べて。食べて元気になって。

がんばって。

首たちに囁きかける。元気付ける。首は、少しずつわたしの指先をかじると、次第にまぶたを持ち上げてゆき、むしゃむしゃとわたしの拳をたいらげた。良かった。まだみんな、救える。

案の定あいつらは気温調節機をいじっていた。畑の隅に設置されているそれを、本来の数値に戻す。発見が早かったから、幸いにも被害は少なく済みそうだ。

ホッとすると同時に、あいつらへの怒りがふつふつと湧いてきた。さすがに今回は、見逃してやれない。どこに隠れているかくらい、わたしには丸見えなんだから。

空を仰ぐ。

その一点の雲。雷雲。

調節機をいじる。雷雲から、雷を生成するくらい、今日のわたしの食費を抜けば容易なことだった。

雷。ぴかり。落ちた。先には。昨日の、誰か。

胴のある人。

雷の落ちた地点に行ってみると、そこに確かに人が横たわっていた。わたしのことを侮っていたらしい。避雷することもなくやられたようだ。

あいつらは、なぜこうも邪魔してくるのだろう。また来期も、その次も、こうして邪魔をしてはわたしに仕事を提供するのだろう。

その人の胴体から、首を切り取った。

ついに収穫期がやってきた。

ようやくきたよ。待ち遠しかった日。

あーあー、あー。

今日はなんだか首たちも活発だ。自然と鼻歌が出る。

良い香りが畑中を満たす。

わたしは試しにひとつ、首を地面からひっこぬいた。

あー、あー、あー。

今度はどんな味に仕上がったかしら。

林檎みたいに。

首をかじった。

果汁がしたたり、服が汚れる。

とっても美味しくできていた。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.11.16 23:29

最終更新 : 2013.11.16 23:31

総文字数 : 2248 字

獲得☆ 4.200

《入賞作品》

ライフログハックな彼女たち

犬子蓮木

『林檎は嫌いじゃなかったんですか？』

リビングでこたつに入ってケータイを見るとツイッターでそんな言葉が飛んできた。わたしはなんでそんなことを言われるのかがわからない。『なんで？』と聞き返してみると、その言葉を送信してきた相手は、わたしが林檎を嫌いだと思っていたということだった。たまたまテレビを見ていてわたしが林檎について、おいしそうってツイートしたから、気になったらしい。

『別に林檎は好きだけど』

『でもブログにすごい嫌いって書いてあったような』

わたしはもう五年ぐらいブログを書いている。相手はそんなわたしのブログの読者だった。たくさんあるし、なにか勘違いでもしているんだろうか。他の誰かのブログと間違えているのかもしれない。

「テレビかえていい？」

リビングに現れたお姉ちゃんが言った。ちょっと冷たい感じだけど綺麗なお姉ちゃんで大好きだった。

「いいよ。わたし部屋戻るし」

「そう」

お姉ちゃんがチャンネルを変える。

わたしは、じゃあね、と部屋に戻った。

部屋の明かりをつけて、机に座った。ノートパソコンのふたを開いて、スタンバイから復帰するのを待つ。一応、確認したかった。もしかしたら昔、嫌いとか書いたのかもしれない。

思うことなんて、たびたび変わるし、なにかそういう気分のときもあったかもしれない。さほど問題がなければそれだって成長とかかもしれないからそのまま良いと思うけど、あまり悪い書き方なら直したほうがいいかなと思った。修正ではなく、追記とかでもいいし。それに気になっていることもあった。

ブログを開いて検索欄にキーワードを入れる。

記事がひっかかった。ひとつだけ。そのエントリを開いて読む。

『林檎は大嫌い。ぐしゅぐしゅした感じがイヤだし、なんか安っぽいよね。梨は好きかな』

確かにそう書いてあった。だけど、記憶はない。なんだろう、そんなイヤなことがあった旅行だったっけ。わたしはしょうがないので追記した。一回も嫌いになった覚えはないけど、『今は好きです』と。

それからツイッターで教えてくれた人にも返事をする。あやまって、昔はそう書いててみたいけど直しましたと伝えた。

椅子の背もたれに体重をかけて、首をまげて天井を見る。男性アイドルのポスターが貼ってあった。ずっと好きなんだ。

それにしてもなんだろう、最近、こういったことが多かった。ブログを読んでくれた人と話したときに、『～ですよ』と言われても『???』と答えに困ってテキストに戻したりしている。確かにブログを確認するとそう書いてあるので、わたしが昔、そう思ったのだろうと考えていた。

でも、林檎を嫌いになった覚えなんてない。そのとき『この林檎まずい』となることならあるだろうけど、それ自体を嫌いになるっておかしくない？

わたしは他のエントリも見ていくことにした。振り返って読むのは嫌いではない。懐かしかったり、ああ、そんなこともあったなーと楽しめるから。

だけど、今、目の前に出てきたものはそんな風楽しめるものではなかった。『彼氏と別れました。あいつ浮気して最悪。名前晒すのでみなさん気をつけてください』

そんなことを書いた覚えがない。『幾星霜のときを乗り越えて、ついに買っちゃいましたよあの本(*´艸`*)ウフフ 今夜のお楽しみ』

そんなもの買った覚えがない。『大好きなお姉ちゃんと旅行にいきましたー』

お姉ちゃんと旅行？ いつ？ そのときは彼氏と言ったはずだ。

おかしい。おかしい。わたしの記憶が間違っている？

もう一度、ブログのトップページに飛んだ。だけど、その瞬間、カテゴリ別にエントリ数が変わった気がした。さっきよりもひとつ増えたような。

わたしはそのカテゴリのリンクを押す。一覧を上から眺めていって、そう、見つけた。また書いた覚えのないエントリがあった。

タイトルは『さみしい』というもの。

中を読んで、わたしは部屋を出た。リビングに向かい、こたつに入ってテレビを見ていたお姉ちゃんの肩を掴む。お姉ちゃんが持っていたケータイがこたつ布団の上に落ちた。わたしは善意からだけではなく、拾おうとする。

「さわらないで」

お姉ちゃんが静かに言った。

「なんで？」

わたしは構わずケータイを拾いあげた。そして画面を確認する。やっぱり……、そこにはわたしのブログの管理画面が映っていた。

「なんで？」

わたしは同じ言葉を繰り返した。言葉は同じでも意味は違う。それを示すようにお姉ちゃんにケータイを突き出していた。

「パスワードを好きなアイドルとかにしてちゃダメだよ」

「そうじゃなくて！」

たしかにパスワードは部屋にポスターをはってあるあの人のプロフィールだった。それはセキュリティ上わるいかもしれないけど、だからってそれを知って勝手にブログを書き換えていいわけじゃない。

「なんで勝手にブログ変えちゃったの？」

「さあ？」

お姉ちゃんがほんとうにわからないという表情を浮かべる。いつも冷静で聡明なお姉ちゃんが、冷たいままこわれてしまったみたい。

「もう絶対やらないでよ」

「うん、ごめんね」

「あやまるならするな！」

わたしは怒りがおさまらず、部屋に戻った。ブログのパスワードを変える。ああ、全部確認してなおさなきゃなー。めんどくさくなって、とりあえずツイッターを開いた。なんか怒りをツイートしないと気が済まない。だけど、そこではもう会話が進んでいた。

わたしじゃないわたしが友達と……。

『お姉ちゃんとケンカしちゃった。お姉ちゃん大好きだからちょっと落ち込む……』

『元気だしてー』

『(´・ω・`)ウン……』

投稿時刻 : 2013.11.16 23:44

総文字数 : 3452 字

獲得☆ 4.200

《入賞作品》
娘と林檎（仮）
永坂暖日

王の寝所には、ひと抱えはある黒い桶がある。ずっと昔、王弟だった王が即位した頃からあるという。漆塗りの桶はぴたりとはまる蓋をかぶせた上で太い縄で嚴重に封印しており、王はそれを誰にも触らせない。よほど大事なもののなのかと思えばしかし、蓋にはうっすら埃が積もり、磨かれた様子がない。それでも王は黒い桶に誰も近付けさせず、寝台から見える場所に置いていた。

あの桶には何が入っているのでしょうか？

王の寵愛を一身に受ける妃が尋ねても、王は口元を歪めて笑うだけで中身が何かは明かさず、近付くことも許さない。

きっとたいそう大事なものが仕舞ってあるに違いない。

王の身の回りを世話する者はいずれも身元確かで、余計なことを喋らぬ口の堅さが求められるが、人の口に戸は立てられぬというもの。

王の寝所にある黒い桶とその中身について、様々な憶測が密かに、だがまことしやかにささやかれていた。



事実を素っ気なく綴ってあるだけの手紙に目を通すと、シェクタはそれを暖炉に投げ入れた。燃えさかる炎に飲み込まれ、あっという間に灰になる。

今朝は、この冬初めての霜が降りた。しかし、じいやが夜も明けぬうちから部屋を暖めていてくれたおかげで、寝台を出ても寒さに震えることはなかった。

「……良い知らせではなかったのですね」

部屋の中も、じいやが淹れてくれた茶も温かい。しかし、シェクタの表情は冷え冷えとしていた。寒い朝に聞く知らせとしては、あるいは相応しかったのかもしれないと皮肉に思う。

「《巫女狩り》が死んだ」

殺された、と言う方が正しいだろう。

腕の立つ男だった。隣国から流れてきた傭兵で、報酬と引き換えに、シェクタの残酷で途方もない依頼を引き受けてくれた男だった。

この国の王は、代々長寿で知られている。暗殺されて短命の王もいるが、概ね長生きで、それを可能にしているのが「神水」と呼ばれる特別な酒だと言われている。そして、その製法を知るのは《神水の巫女》と呼ばれる女たちだけ。

シェクタは傭兵に、その女たちを捜し出して殺すことを命じた。

神水は、限定的な条件下でしか育たない特殊な穀物を原料にしており、その栽培を託された一族に守られている。《神水の巫女》は一族の中から選出され、引き継がれていくという。しかし、その一族がどこにいるのか、栽培可能な場所がこの国にどれだけあるのかは明らかにされていない。

一ヶ所ではないはずだ。神水の原料である穀物はほんのわずかししか取れず、だが王は、頻繁ではないにせよ、神水を度々口にしているのだから、それを可能にする程度には、栽培可能な場所と製法を知る巫女がいるはずだとシェクタは考え、傭兵を雇ったのだ。

シェクタが考えていた通り、栽培可能な場所はいくつかあり、その数だけ巫女も存在していた。傭兵が《巫女狩り》と、神水に関わる一族に呼ばれ恐れられるくらいに。

だが、その《巫女狩り》も振り返りに遭った。神水を根絶やしにすることは叶わなかったが、傭兵の調べたところでは《神水の巫女》は、彼を殺した巫女を含めて三人。これまでのような量が、王に献上されることはない。

――まずまずの成果は得られたか。

傭兵にも、巫女たちにも、気の毒なことをしたとは思う。シェクタは彼らに何の恨みも抱いていない。彼女が恨んでいるのはむしろ神水だった。王に不老長寿をもたらす珍妙なる酒が、この世から消えてなくなればいいと願っていた。そのためならば、どんな犠牲を払っても構わない。

「城へ行く。支度を」

暖かな炎を見つめる瞳は、あの男と同じ凍える水色。

恨みもない者を殺せと平気で命じる自分は、やはりあの男の娘なのだろう。



今の王は、王弟であった時に兄を弑逆し、王位を篡奪した。

仲の良い兄弟だと言われていた。王弟は兄である王をよく支え、裏切るなどあり得ないと誰もが思っていた。

だがある朝、王の寝所から血濡れた姿で出てきた王弟は、今日から自分がこの国の主であると告げた。寝所には、首のない王の亡骸が転がっていた。

驚天動地どころの騒ぎではなかったという。しかし、謀反を起こす気配を毛の先ほども見せずに兄の首を刎ね篡奪した王弟に誰もが恐れをなし、兄王の正妃をそのまま自分の正妃とすることにも異論を挟まなかった。

彼が欲しかったのは、王位と、兄の正妃だったのだ。仲の良さなどいくらでも取り繕える。あとから生まれたと言うだけで王にもなれず、慕っていた姫を兄に奪われ、彼は恨みと妬みを募らせていた。

その恨みつらみがどれほど根深く、王の心のかなりの部分を占めているのか、シェクタは知っている。

先の王の正妃であり、今の王の正妃でもある女性が、シェクタの母だ。シェクタが生まれたのは、篡奪の

あった後。どちらがシェクタの父親なのか、誰にも分からない。面立ちは母親似だが、瞳の色は今の王と似ているので、恐らく彼が父親なのだろう。

だが、愛情というものを父である王から感じたことはない。王が愛情——愛憎かもしれない——を注ぐ相手は、常に妃であるシェクタの母のみ。シェクタの後に生まれた、紛れもなく王の子である弟たちにも向けられた試しはない。

父であろう王と母が、今のシェクタと同じくらいの歳だった頃、二人は夫婦になろうと密かに誓い合っただけらしい。しかし、約束は反故にされ、母は先の王の正妃となった。

王が篡奪をして母を手に入れ、今もそばを離れるのを許さないのは、そんな過去があったからだ、少しだけお喋りな乳母が教えてくれた。

その話が嘘かまことか、母は重要なことではないと言って話そうとしない。前の夫を殺した男の妻にされたというのに、母はたいして王を恨んでいないようだった。正妃という立場の方が、よほど大事なのだろう。

弟に裏切られ、妻だった女に顧みられることもなく。

——あなたは、さて、どれだけ彼らを恨んでいるだろうか。

それとも、安らかに眠れる日を夢見ているのだろうか。



王はこのところ体調が優れず、寝所から出られない日もある。

シェクタの依頼を受けた傭兵が《巫女狩り》と呼ばれるようになった頃からだ。神水によって押さえ込まれていた持病が、にわかに息を吹き返したのだろう。

傭兵は殺されたが、これほど弱っているならば大丈夫だろう。

「昨日、北の地より林檎が献上されたので、見舞いの品にと持参しました」

侍従に持たせたカゴには、紅玉のように赤い林檎がいっぱいに入っている。それを母に渡すと、シェクタは侍従を下がらせた。王は、寝所では母と二人きりでいるのを好むため、シェクタの侍従がいなくなると親子三人だけになる。

寝台の傍らで王を看ている母が、手ずからその皮を剥いて食べやすい大きさに切り分け、王の口元へ運ぶ。王は嬉しそうに、弱々しくそれを咀嚼し、母にも食べるように勧めた。シェクタを一瞥もしないが、いつものことである。

美味しいですねと林檎をほおぼる母と、嬉しそうな顔でそれを見守る王は、仲睦まじい夫婦そのものである。篡奪という血みどろの過去などなかったものであるかのように。

だが、寝所が再び血で染まる。

まず王が吐血し、驚いた母が、次いで血を吐いた。悲鳴を上げる間もなく血を吐いた二人を、シェクタは冷やかな目で見つめていた。

まだ息はあるようだ。しかし、それも長くはない。

立ち上がったシェクタは、寝台から見える場所に置かれている、黒い桶に向かった。縄を解き、蓋をそっと持ち上げる。

王が誰も近付くのを許さなかった桶。その中に入っている、きっと王の大事なものに違いないと噂されているもの。それは——先の王の首級だ。

兄の刎ねた首を、弟はこの桶に入れ、長らくそばに置いていたのである。

首は、少々青白いが、今もまるで生きていたかのような血色だった。

――これで、生きている、と言うのならば。

恐らく、生きているのだろう。

桶からは、むせるような酒の匂いがした。神水である。

弟は、首だけにした兄を生き長らえされるために、神水に浸していたのだ。

情けをかけたのではない。首だけになって声も出せない兄に、彼のものをすべて奪ったことを聞かせるために、こうしているのだ。

先の王が、きょろりと眼を動かして、シェクタを見た。蓋を開けたのが弟ではないと知って、驚いているようだった。

「あなたはもう、眠って良いのです」

桶の中の神水を捨て、首をそっと取り出す。しばらくは目をしばたたかせ、先の王はまっすぐにシェクタを見ていたが、やがて動かなくなった。

シェクタの父親は、先の王なのか、今の王なのか、分からない。

先の王もまた、冷え冷えとした水色の瞳をしていた。

投稿時刻 : 2013.11.16 23:41

最終更新 : 2013.11.16 23:44

総文字数 : 3636 字

獲得☆ 4.100

スノーホワイトは赤い林檎を好む

晴海まどか

山と呼ぶには少々心もとない、小さな丘だった。まだ日は昇りきっておらず、空がほんのりと白み始めてきたくらいだった。ライトがなくても足元は見える程度には明るかったが、僕はとにかく寒かった。吐く息も白く、途端に指先がかじかんでジャケットのポケットに突っ込んだ。うっそうとした針葉樹に覆われた森。かろうじて判別できるようなけもの道を、彼女は白い息を吐き出しながらも、僕のように背中を丸めることもなくざくざくと歩いていく。

「あ、ここここ」

大きな杉の木の根元。古い切り株が近くにあった。むき出しの茶色い地面は霜が降りていてうっすらと白い。ようやく森を照らし始めた朝日を受けて霜柱がキラキラと輝き始め、凍えつつも綺麗だなあなんて思っていた僕のことなど一切無視し、彼女は持ってきていたシャベルを地面に突き立てた。霜柱のせいか、枯れ葉のせいかはわからないが、ザク、と軽快な音がした。彼女は穴を掘り始めた。

何やってるの、と訊いてもよかった。けど、彼女の行動が突飛なのは今日に限ったことではない。体を縮こませ、そんな彼女をじっと観察するに留まる僕は草食系だ。

見慣れた血の色に近い濃い赤——えんじ色のダッフルコートに身を包んだ彼女は、その細くて白い素手でシャベルを振り上げた。がつ、と何かにぶつかる音がした。

「あった」

そう呟いた彼女の目が見開かれ、白い肌には不自然なくらいに赤い唇が綺麗な三日月形に引き伸ばされた。魔女のように黒い髪が顔の前に流れる。

「手伝って」

彼女に指示されるまま、僕はかじかんだ手でそれを地面の中から出すのを手伝った。

青いポリバケツだった。小さめのもので、人一人で抱えられるくらいの大きさだ。

地面の中から取り出したそれを彼女の足元におろした。湿った土で表面の汚れたそれを彼女はひと撫でし、長いまつげをしばたかせて上目づかいで僕を見る。

「これ、なんだと思う？」

「ポリバケツ」

「違う、中身の方」

中に何かが入っていそうだというのは、なんとなくわかった。けど、男の僕の足がふらつくほどの重さ

はなく、むしろ軽すぎるくらいだった。

「ゴミ？」

はっと彼女は笑った。面白いことが言えるとは思ってなかったけど、と付け加える彼女は、基本的に僕に手厳しい。

「生首。ここには、生首が入ってるの」

彼女と出会ったのも、一年前、今日みたいに寒い朝だった。

大学のコンパで、朝まで飲み明かした。始発が動き始めることによりその会は解散となり、飲み屋からほど近い――つまりは大学から徒歩圏内に住んでいた僕は、駅に向かう仲間たちに一人手を振って、帰路についた。

酔っていたし、疲れていた。けど、吐きだす息は白くて指先がすぐにかじかみ、自分でも驚くほどに頭は冴えていた。少し頭痛もあったせいかもしれないけど。

彼女は僕の住んでいるアパートの入り口にしゃがみ込んでいた。膝を抱え、顔を伏せて丸まっていた。長い黒髪は地面につきそうでつかないくらいに長かった。えんじ色のコートを着ていて、遠目にもその姿は目立った。

――大丈夫？

人通りはなかった。こんなに寒いのに、こんなところで寝たら凍えちゃうんじゃないかと不安に駆られた。丸まった彼女はあまりに小さく、今にも死にそうな捨て猫のようにも見えた。

僕が声をかけてから、十秒くらい経ったと思う。彼女はゆっくりと顔を上げた。

白雪姫だ、と思った。

彼女は驚くほど肌が白かった。ロマンチストでもなんでもない僕が『スノーホワイト』だなんて単語を連想してしまうくらいに。

そしてその白さとあまりに対照的な、漆黒の髪と、赤い唇。その赤さは僕に血を、毒林檎を連想させた。

「あの首の主はね、毒林檎を食べて死んでしまったの」

僕のアパートに戻ってきて、彼女はなんだか楽しそうにそう語った。毒林檎、なんて単語を聞いたせいで、僕は彼女と出会った日のことを思い出したわけだけだ。

僕は彼女が掘り起こしたポリバケツの蓋を開けなかった。彼女はそんな僕をしばし観察して、再びそれを地面に埋めてしまった。

――あなたはきっと、中を見ないと思った。

わかるわ、と彼女は言葉を続ける。

――パンドラの箱は開けないに越したことはないもの。

部屋の暖房をつけた。すっかり体が冷えてしまった。冷たくなってしまった布団にもう一度潜り込んだ僕の隣に、彼女はするりと滑りこんでくる。彼女の体は見た目どおり体温が低くて、僕の体は一向に温まらない。

毒林檎を食べて死んだ、という彼女の言葉に、僕はほんの少しほっとしてもいた。本当に生首が入っていたらどうしようと半ば思っていたのだが、彼女の妄想ならそっちの方がいい。

布団にもぐって、彼女は語り続ける。赤いネイルの右手を伸ばし、僕の首に触れる。

「毒林檎を食べた白雪姫が、いつだって王子様のキスを受けられると思ったら大間違いなのよ」

僕は彼女のような人間に会ったことがなかった。

白く、黒く、赤い彼女が同じ大学の学生だと知ったのは、彼女と深い仲になってからだった。さして学生数も多くない小田舎の大学で、彼女のような外見的に目立つ子を今までどうして認知していなかったんだろうと僕はあとから不思議に思ったのだが、それもそのはずだった。

大学での彼女からは、赤い色が抜け落ちていた。

僕と二人で会うとき、彼女はいつも血のように赤いルージュをひき、ネイルを丁寧に塗っていた。僕の中にその赤は、今だって強烈に刻まれる。けど、その赤を彼女は大学では隠している。

白くて、冷たくて、でも内側に秘めたその赤に、不思議な子だという感想しか僕はもう抱けなくなっていた。冷静になって距離を置いて見てみたら、愛しいと思う以前に不気味さが勝るだろうに。彼女の突飛な発言も、行動も、僕にはもう彼女の専売特許だとしか思えなかった。

彼女は赤を愛している。そしてそのことを知っているのは僕だけだ。

彼女の部屋に、僕は一回だけ踏み入れたことがある。なんてことがない1Kの一人暮らし用のマンション。

だが、赤かった。

カーペットもカーテンも、食器も家具も何もかもが赤かった。置いてある文房具も赤い林檎の柄で、そのかわいらしさが不気味に思えるほどだった。

赤い部屋にいと、彼女は少し凶暴になる。血が滲むまで、赤い爪を僕に突き立てた。盲目気味だった僕もさすがにこれには驚き、それ以来、彼女と会うのは僕のマンションになった。

ポリバケツのことなんてすっかり忘れかけていた頃だった。

森の中で、首のない遺体が見つかって、静かな田舎町が騒然とした。遺体は損傷が激しく、また首もなかったせいで、まだ身元の確認が取れてないとのことだった。

僕の部屋で一緒にそのニュースを見ていた彼女は、顔色一つ変えなかった。血の気を引かせているのは僕だけだ。

僕は彼女を問い詰めた。あのポリバケツには何が入っていたんだと彼女に訊いた。ただのゴミだ、と答えてくれればよかったのに。

彼女は黙って笑った。

怖くなって彼女を突き飛ばしてしまい、あ、と思ったときには遅かった。

細くて小さな彼女の体はあっさりと吹っ飛び、置いてあったテーブルの角にその後頭部がぶつかる鈍い音が響いた。

動かなくなった彼女をそのままに、僕はアパートを飛び出た。外に出たら自分でも不思議なくらい冷静になって、大学の講義に出ることにした。いつもと違う行動を取ったら疑われる、と考えた。疑われるも何も、部屋から彼女の遺体が見つかったら何もかもが終わりなのに。

彼女の遺体をどうすればいいのか、大学にいる間中ずっと考えていた。そして、ポリバケツのことを思い出した。

もしも本当にあそこに生首が入っているのならば。まだそれが見つかっていないのならば。

そこに彼女の遺体も隠してしまえばいいのでは。

午後の講義を終え、僕はマンションに駆け戻った。部屋の外に異臭は漂ってこなかった。冬なのが幸いしたのかもしれない。覚悟を決め、部屋のドアを開けた。

彼女は僕が部屋を出たときのまま、部屋の中央に倒れていた。その上半身には、えんじ色のコートをかけておいた。

彼女の体に触れないように近づき、僕はそっとそのコートをはがし、声にならない悲鳴を上げてその場にひっくり返った。

頭部がなかった。

その首には、赤い切断面が覗いていた。骨が、気管の切断面までが綺麗に見える。

両手が震え、自分で腕を抱いた。首がないという事態以上に、何かがおかしいと考え、あ、と声を上げる。首を切断されたなら、辺り一面が血の海になっていてもおかしくないのに。

首はどこに、と考え、部屋を飛び出した。

外は日が暮れかけていて、森に到着した頃には足元があまり見えなくなっていた。

以前は彼女が使っていたシャベルを片手に、僕は切り株を目指した。辺りは暗くすっかり闇に沈んでいたが、それは驚くほどあっさり見つかった。

地面にシャベルを突き立てる。ザク、と小気味よい音がし、すぐに何か固いものにあたった。

土を両手でかきだし、ポリバケツを片手で引っぱりあげた。以前にはなかった、確かに存在する重みを感じつつ、その蓋を開けた。

《「林檎」賞》

齧る

茶屋

魔法の秘薬にリンゴを浸けよう、永遠なる眠りがしみこむように

チューリングは林檎を齧って死んだ。

死因は青酸中毒。

林檎に青酸を塗り、それを食べての自殺だといわれている。

あるいはただ永い眠りにつくつもりだったのかもしれない。

死は眠り。

永きの安息。

そう。

白雪姫のように。

だが彼には王子様もやってこなければ、小人たちもやってくることは無かった。

死の間際、チューリングが落とした林檎はニュートンのもとへと落下した。

頭にしたたかな衝撃を受けたニュートンは重力を発見したとも、首を痛めたとも、気が狂ったとも言われている。

彼が歴史の中に名を刻んだ業績はこの引力の発見の他にも数多くあるし、必ずしも現代の物理学の基礎が、彼の手にした林檎の種から茂ったものだけとは言い難い。けれども、彼の知と林檎は強く結び付けられて語られている。

何故なら林檎は、知の象徴だから。

蛇は林檎を人間に与える。

例えば男と女で、例えばお初と徳兵衛。

結ばれぬ恋も、せめて来世でと林檎を齧る。

此の世のなごり。夜もなごり。死に行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜。

閉幕。

否。

齧ったのはアダムとイブ。

彼らは禁断の果実を齧り、知を手に入れ、楽園を追放される。だが、彼らにはそれが本当に林檎であるかどうか疑う知能は無かったようである。

また天界より火を奪い、人間に火を基とした「知」をもたらしたプロメテウス。

彼はヘラクレスが求めた黄金の林檎を得るための知恵をやはり授けている。

岩に張り付けられ肝臓を禿鷹についばまれるという悲惨な目に合っているが、知恵を授けたお礼にとヘラクレスに助けられている。

林檎は知を助く。

現代でいえば Apple 社。

ロゴマークは齧られた (bite ⇨ byte) 林檎。もちろん齧ったのはチューリングではなくジョブズ。ジョブズの知はどれほどのものか、歴史がどのように評価するかはわからない。ただ、彼は林檎を齧った。

禁断の実であったはずの知恵の実は今も人々に貪欲に食われ続けている。

たとえ神に見放されようとも。

たとえそれが墮落であったとしても。

人は常に求め続ける。

知を。

そして、禁断を。

やがて目覚めるだろう、白雪姫は王子の口づけを待ちながら今も眠り続けている。

投稿時刻 : 2013.11.16 23:43

最終更新 : 2013.11.16 23:53

総文字数 : 899 字

獲得☆ 3.800

実に、ささやかな

志菜

「今宵は満月。霜月も、もう半ばか」

「あっという間に師走ぞ。今年も掛取りから逃げ回らねえと」

居酒屋の片隅で、胸当てを付けた職人風の男が二人、空樽に腰を下ろして銚子を傾けていた。夜も更けて、客はこの二人の男だけである。

若い方の男が、煮豆を箸でつつきながら苦笑いを浮かべた。

「去年は店賃を溜めたあげく、大家に居座られて逃げ出すこともできず、ひどい目にあった」

「お前なんかはまだ独り身だからいいよ。女房子供に泣かれてみる、それをうっちゃって逃げる辛さといったらよ」

「結局逃げるのかよ」

肩を揺すって、低い笑いをもらす。

「しかし世知辛い世の中になったよなあ。真面目に働いていても雨が三日も続けば干上がっちゃうなんてよ」

「でもまだ俺達はましだぜ。お武家様なんてよ、家禄を削られ、それでも格式は守らねえとならねえ。数年先の俸禄まで押さえられて首が回らねえなんて話は吐いて捨てるほどあるらしい」

「どこも同じか。蔵ん中に金が唸ってるの是一部の商家だけか」

暗い面持ちで杯を空けた若い男は、ふと、動きを止めた。何かに気づいたように、店の中を見渡す。煮炊きの煙でくすんだ狭い店の中に、清涼な香りを感じたのだ。

「何か匂いがしねえか？ こう、甘いような、清々しいような」

もう一人の男は鼻が詰まっているのか、怪訝そうに四方を見渡して首を傾げる。

「いや？ 俺は分からねえ」

「もしかして、これじゃありませんか？」

板場にいた店の親父が、小さな行李を持ち上げてみせた。傾けると中には、一寸ばかりの赤い実がいくつか入っている。

「なんだそりゃ、金柑……じゃねえな。李か？」

中腰になって覗き込む若い男の手に、店の親父はその実を載せた。

「林檎……っていう実らしいです。味は酸っぱくて食べれたもんじゃないらしいですけど、色と匂いがいい

でしょ」

「へえ、初めて見たぜ。林檎かあ」

もう一人の男も、覗き込む。若い男は赤い実を指先で摘んで、それから鼻を近づけ大きく匂いを吸い込んだ。

「ちょっと、いいもんだな」

「そちらのお客さんもお一つどうぞ。子供さんの玩具にでもしてやってください」

親爺はもう一人の男にも手渡す。

二人の職人の男は互いに顔を見合わせて、忍び笑った。

林檎と彼女

orksrzy

早朝の空気はぴんと張りつめて冷え込んでおり、草には霜が降りている。私の肌は切り裂かれるように痛んだ。

朝日に照らされる温泉街を横目で眺め、私は足早に駅舎へと向かった。

雪の浮かぶ道には私以外の足跡は作られておらず、この時間に出発するのは自分くらいのものなのだろうと思った。

駅に着くと切符を買い、ホームに入り、待合室で暖を取る。待合室はむわっとしており、暖かいのだけれど息が詰まるようでもあった。

ふと、待合室の椅子に赤いものが置いていることに気づく。すぐにそれが林檎だと分かった。

「……こんなところに」

私の胸がきゅっと締め付けられる。

私が大学に行かず、放浪の旅へと出たのは、林檎こそが始まりであった。

「赤い芸術品だと私は思う」

誰もいない大学の講義室にて、私は彼女に言った。講義が終わった後のこの空間は私と彼女の為のものだと、当時の私は考えていた。外には樹木が生い茂り、学生たちの歓声が聞こえる。

私は大学二年生だった。初めて女性と親しくなることに成功し、件の発言をした。

「ただの果物じゃない」

彼女はそう言うけれど、楽しそうに笑っていた。

彼女のことを語ると、そう例えば彼女は素直じゃない。林檎が好きなのは本当は彼女の方なのに、今みたいに私が林檎を褒め称えると貶してみせたりする。

ある時、彼女は私に言った。「林檎の次にあなたが大事よ」と。それは冗談にしてはひどいよと私は笑った。その時も講義室だったと思う。

けれど、あれは冗談なんかじゃなかった。

私がインフルエンザで寝込んでいる時、彼女からメールがあった。私は体中がだるく熱く、関節が痛み、うなされていた。しかし、想いを持つ彼女からのメールとあらばと、メールを読むとそこには、林檎が食べたい、と一言だけ添えてあった。

ひどいじゃないか、私は寝込んでいるんだぞ、と思わずメールを返したけれど、反応はなかった。私はその後一週間寝込んだ。誰も、見舞いに来なかった。

「何故、君は私を大事にしない？ 恋人になっていないからか？」

病み上がりの私はまだ意識がもうろうとしていて、そんな半ば告白めいたことも言ってしまった。

彼女はふふっと口端で笑うと「でも、あなたは二番目に大事。一番は林檎……」とかわす。

カフェで二人でコーヒーを飲んでいる時もそうだった。彼女は林檎を持っていた。というか、彼女は常に林檎を持っていた。そして、ナイフも常備しており、どこでも構わず、綺麗に林檎の皮をむいて、食べた。

「私は永遠に一番になれないのか？ 君にとって僕は、僕という人間は……！」

コーヒーを飲む私は、突然、林檎をむき出した彼女を許せず、言葉を荒げた。

彼女は相変わらずの笑みを浮かべる。「林檎が一番なのは仕方がないじゃない？ ねえ？」

しゃり……しゃり……と皮をむいていく彼女がその時、手を止めた。

「そうね。あなたと林檎が合わされば、私は何よりもそれを愛すわ」

それは無理な話だ。そんなハイブリッドな生物に、私はなれない。肩を落としてカフェを後にした。よくよく思いだせば、お勘定代を置いていくのを忘れた気がする。それはまあ、過去の話だ。忘れよう。

そんな彼女との日々で私は疲れ切ったのか、またもや病に倒れた。

どうにも体がだるく、頬が真っ赤になった。照れているわけではない。苦しいのだ。熱も高かった。

なんとか体を奮起させ、病院に行くと、医者が重苦しい口調で喋った。

「あなたは、――リンゴ病です」

私は歓喜した。

病気の名前ではあるが、林檎を手に入れたのだ。この病臥の私は今、リンゴとハイブリッドしているのだ！

さっそく彼女にメールをした。なるべく重症であるかのように長文を書き込み、最後に病名を告げた。

<心配だわ。今すぐ行くから待ってて>

彼女からの返信メールは早かった。送った直後に帰ってきたので、読んだのかどうかも疑わしい。おそらく何らかの能力で読み取ったのだろう。彼女は林檎に狂った女だ。そして、今、私はリンゴ病である。彼女が本気で心配してくれること間違いなしであった。

うひひ、これは看病されてる間にお互いの感情が高ぶって、ひょっとしたらひょっとしてしまうかもしれない――

熱でうなされる私の妄想は膨らむばかりだ。

とりあえず、彼女が来るまで横になっていようと布団に寝転がると、頭を無駄に使ったせいか、すっと眠りに落ちてしまった。

しゃり……しゃり……

目を開けると、彼女が枕元に座り、林檎の皮をむいていた。

「……来ていたのか？」

なるべく冷静を装って声を出した。

「当たり前じゃない」

彼女の林檎の皮をむく手は止まらない。

「ずっと夢だったの……」

そうか。恋人になるであろう男を看病するのが夢だったのか、だったら早く来れば良いものを……、と内心はほくそ笑んでいたが、もちろん、そんなものおくびにも出さない。

「ああ、嬉しい。ずっと叶わないと思っていた……！」

その時、彼女のリンゴの皮をむく手が小刻みに震えているのに気付いた。

え、なに？ ちょっと危なくない？ 手を切っちゃうよ、と私が平和的に考えている所へ、彼女がわなわ

など全身を震わせ出した。

「私ね、ずっと叶えたい夢があった」

彼女は何故だか早口で心ここに非ずと言った雰囲気で喋り出した。

それはキスか？ キスなのか？ と大学時代の私はアホであった。

「世界で一番愛する人と、世界で一番愛している林檎というもの、この二つのものが重なったら、それを――」

私はきょとんとして、尋ねた。

「重なったら？」

彼女はふいに林檎を放り投げ、ナイフを振り上げた。

「食べたい！」

どすんっと床が振動した。ナイフが突き刺されたのだ。私の首すれすれのところにナイフが突き立っている。

「ちょっと、君ね……」

私は自分が林檎病という病に侵されていることも忘れて――それはだいぶ前から忘れていたが――、部屋を逃げまわった。

「死ね！ 食わせろ！」

彼女がナイフを振り回す。

私はパジャマ姿のまま、外へと飛び出した。

彼女が外に向かって吠える。

「どこへ行っても追いかける。必ず、あなたを見つけて、殺す！」

それ以来、私は放浪の旅を続けている。

ぶおおおっと列車の音が聞こえた。

私は待合室からホームへ出る。列車が飛び込んできて、やがて、私の前で止まる。

ぷしゅーっという音とともに、扉が開く。

そこには、鬼の形相の彼女がいた――右手に林檎、左手にナイフを持って。

「食わせろ！」

私は慌てて逃げ出した。

「もう林檎病は治ったんだよ」という叫び声を上げながら。

投稿時刻 : 2013.11.16 23:05

最終更新 : 2013.11.16 23:09

総文字数 : 2033 字

獲得☆ 3.583

電子レンジ

ひこ・ひこたろう

「電子レンジ使いたいから、エアコン消して欲しいんだけど」

妻がパジャマ姿のまま現れて、そろそろベッドから這い出そうとしていた私に言った。

「さっきつけたばかりなのに……」と私は渋る。枕元にあったリモコンでエアコンの暖房を入れたばかりだ。部屋がある程度暖かくなったところで布団から出ようという魂胆だった。それを電子レンジごときのために切らなければならないなんて納得できない。

「エアコンはな、起動する時に一番電気代がかかるんだ。一度、スイッチを入れたら滅多なことでは消しちゃいけない」

私が強く抗議をすると、妻は「ああ、そう」と大人しく引き下がった。

さて、ベッドから無事に降りた私はパソコンラックの方に向かい、おもむろに PC の電源を投入した。朝はやっぱり Yahoo のニュースと天気予報からチェックしなければならない。それを横目で眺めつつ、大塚さんがいつ電撃復帰をしてもいいように、TV のチャンネルは「めざまし」に合わせる（首になった皆藤愛子のことは忘れよう）。気がつけば 11 月も半ば、外が明るくなるのも随分遅くなったじゃあないですか。

と、その時、部屋の電気が一斉に消えた。パソコンも TV も蛍光灯もエアコンも何もかもだ。

「大塚さんの身に何かあったのか！」

いやいや、大塚さんと我が家の電気がシンクロするはずもない。それに今年の訃報はアンパンマンの生みの親と島倉千代子と宇多田ヒカルの母で十分だ。大塚さんはきっと完治するはずで、天皇陛下やドライ・ラマ 14 世もそうだけど、みんなと一緒に次の東京オリンピックの年を元気に迎えるんだ。長生き、バンザイ！

「ねえ、あなた」と妻が現れる。「ブレーカーが落ちたの。直して」

「そんなのスイッチをピッって上げるだけだろう」

「どのスイッチ？」

「わかったよ。俺がやるよ」

そう言いながら、私は妻を手で押しのけ、部屋を出て玄関の所にあるブレーカーのスイッチまで行こうとした。途中、ふと見ると冷凍庫の扉が開いたままになっている。霜の中に冷凍食品がぎっちり詰め込んである。電気が通ってない冷凍庫の扉を開けっ放しにするなんて、どんな神経をしているんだ。

ブレーカーを元に戻すと、部屋中の家電製品が息を吹き返したかのように見えたが、私の苛立ちは収まらなかった。

「ブレーカーが落ちるとわかってて、何で電子レンジを動かしたんだ」

「40秒だから大丈夫だと思って。海軍カレーコロッセ1個に要する時間」

「40秒なら大丈夫？ 何を根拠にそんな馬鹿なことが言えるんだ」

「だからさっきエアコンを消してって頼んだじゃない」

「ほほう、人のせいかな？ だいたいこんな寒い朝にわざわざ弁当を作らなくていいよ。今日から社食で定食でも食う。そうしてくれ。ブレーカーも落ちなくて済むし。わかったな？」

そうは言ったものの、妻に見送られ、家を出たところで私は鞆の中を調べ、普段と変りなく弁当が入っているのを確認した。いつもこんな感じだ。妻は私が意図した方向とはまるで別な行動を取ることが多い。まるで嫌がらせのように。

そんな弁当がうまいわけがない。結婚してもう一年が経つというのに、職場の連中は私がまだ新婚気分だと思っているらしく、社食で弁当を広げていると「おっ、愛妻弁当ですね」などといちいち声をかけてくるやつがいる。今となっては別に愛妻でもないし、それに毎日弁当なんだからわざわざそれを指摘することの愚かさを、もうそろそろ悟ってもらいたいものである。

家に帰ると妻がにこにこしながら待っていた。こういう時は嬉しい報告があると相場は決まっている。しかしそれは本人にとっての嬉しい話でしかなく、私にはどうでもいいことが大半だった。

「ねえ、見て見て」と私は部屋に誘導された。

TVの前には小さな携帯電話が置いてある。「電子レンジを使う時はTVじゃなくて、これでワンセグを見てね」と妻。

パソコンラックの前にはとっくに引退させた林檎のロゴが入ったノートブックが置いてある。「PCはこのバッテリーがついているのを使って」と妻。

「朝の40秒だけでいいの、お願い」

「お前、俺に対して不平とか不満とか、他に言いたいこととか、ないのか？」

「えっ、何のこと？」

「朝、俺の言い方、ひどすぎたと思って。反省している」

「別にいいよ」

「俺がよくないよ」

すると妻はしばらく考え込んだ様子を見せたが、すぐに笑顔を取り戻し「ねえ、今度はこっち」と言って私を台所に案内した。

「じゃじゃーん！」と言って見せられたのが、バッテリー装着の冷蔵庫（特注品？）。……そして、洗濯機。まさかと思って居間に戻ると、試作品と銘打ったバッテリー内蔵のエアコン。何じゃこりゃ？ 一体これだけの物をどうやって揃えたんだ。それにいくらするんだ、この最先端電化製品たち。ちょっと待て、電子レンジは今まで通りなのか。

ああ、何かめまいがしてきた。

「ちょっと、これどういうことだ？」

「どういうことって」妻は満面の笑みで私に告げる。「これでもうブレーカーが落ちる心配はないわ」

投稿時刻 : 2013.11.16 23:33

総文字数 : 236 字

獲得☆ 3.455

不完全な首長竜の死

Wheelie

こわばった体を
ゆっくりと伸ばして
再び丸くなる

11 月も半ばになると
朝晩は随分と冷え込むから
余計に孤独を感じる

そもそも
霜柱が立つような気候の中に
首長竜がいることが間違いなのだ

何者にも発見されぬよう
静かに死を待つ

そうしていながら
誰かと時を共有したいと願う

どこかに
仲間がいるのではないかと
彼は夢を見る

首長竜は主に魚を食べる
それから林檎や柿など
高いところにある果実

海でも陸でも
それなりに生きてはいけるけれど
どちらも本当の居場所ではないと
彼は感じている

巨大なその体を
ただ持て余している

切る 茶屋

きし。きし。きし。

踏み出すたびに霜の碎ける音がする。

凍りついた草葉の細胞が砕けていく。

止まった世界。死につつある世界。木々の影はやせ細り、落ちゆく葉もなく、ただ枯れ枝のみを虚しく風に揺らしている。うすぼんやりと浮かぶ、木々の骨たちの間をエパルたち歩いてゆく。手には弓を持ち、背中には矢を携えている。

狩りか。

だがこの森にはもう狐も兎もない。鳥の鳴き声が聞こえる時もあるが、いつも遠い。

枯れた木々には実はならない。かつては豊かな森として知られ、彩り豊かな果実で村人の喉を潤したその姿はもう跡形もない。

エパルは凍りついた林檎を齧って、吐き出した。

苦い味がした。

どこかの国の言葉でその果実を指す自分の名。不吉にも感じられるがすぐに気持ちを切り替える。

弓の弦をぴんと張り、感覚を確かめる。何度もやった最終確認。

だが、今度こそ本当に本当の最後だ。

森はやや傾斜し、下り坂になっている。

先頭に立つピサンがよりゆっくりと慎重に歩く。

霧の中でわずかに揺らめく光が見える。

皆目はいいがさすがに霧の中ではよく見えない。だが、好都合でもある。

慎重に斜面を下り、人影が見えるところまで近づく。

そして、弦を張り矢をつがえ、放つ。

ひゅん。

ぎゅ、という蛙に似た短い悲鳴。

それを合図に皆音もなく走り出す。

腰に携えた思い鉈を抜き放ち、目についた人間の首元を次々と搔っ切っていく。

静かに、だが、凄惨に。

重く、鋭い刃は時には人の頭を首から切り離す。

エパルたちの部族が首狩りと呼ばれる所以だ。

重心が刃先にあり、異様に重いその武器と遠心力を利用した独特の斬撃は首を切ることに特化しており、部族だけに伝承される特殊な戦闘様式だ。

役に立たない技術になりかけ、形骸化どころか失われようとしていたその時、戦争が始まった。

西の大国と東の小国の戦争だ。

その戦争はエパルたちの部族を巻き込んだ。

山間部に住んでいた彼らの部族はその屈強さを買われ、今、戦場にいる。奇襲にゲリラ戦。初めのうちは未開の部族として辛酸を舐めてきたが、今やその戦闘能力は称賛され、兵士たちには尊敬のまなざしを向けられる。

戦争が栄誉を連れてきた。

首狩り。

もはや、それは侮蔑の言葉ではない。

我らが技を世に知らしめ、その術が真っ当な評価を受ける時なのだ。

首を狩る。

潜血にまみれ、宙に舞う首に睨まれながら、エパル達は誇りを感じていた。

祖母の庭

栗田柚香

一庭の林檎の実をもいではいけないよ。
一あれは、お祖母様の忘れ形見だからね。

父の実家を訪ねるのは嫌いだ。

中央駅から1時間。さらに田舎へ進む単線に乗り換えて2時間。自動改札機があることすら不思議な駅を降りた先に広がるのは、侘しい、さびれた、なんて言葉は情緒がありすぎる、はっきり言ってつまらない駅前の風景。鉄と女の人の顔が浮かぶ、小学校の子どもが描いたような美容院の看板。湯気を上げるコーヒーのアイコンと「喫茶」というゴシック体の文字が貼られたガラス戸はなぜか薄茶色で、中を除くと、しわしわ顔のおばさんが、どこかのリビングにありそうなソファに腰掛けて、ぼうっとテレビ画面を見上げている。旅の途中で通りかかっても、絶対中には入りたくない、そんなお店。そうしたお店ばかりが並ぶ風景を脇目にみながら、タクシーに乗り込んで（いつも座席がヤニ臭い）15分程度か。雑草がはびこる空き地の隣で、ところどころ塗り残しがある壁に囲われた一軒家、あれがおじいちゃんの家。

畳と土壁でできた家。リビングにはいつもお線香の匂いがする。欄間にはずらりと誰かの白黒写真が並んでいる。みんな正面を向いているから、見下ろされているようで落ち着かない。おじいちゃんは足が悪いからほとんど使っていない。小学校にあがる前まではいところがいて、小さい頃は彼女に遊んでもらえるのが楽しかったけれど、ずっと前に一家で転勤してしまった。以来2階は放り出してある。いとこの思い出が懐かしくて、昔はわざわざ様子を見に上がったけど、埃っぽくて、抹香臭くて（抹香ってなんだか知らないけど）とても人がいられる場所じゃなくなってる。へんな箱や本や、あとはとにかく紙の山がそこから中に積み上がっている。要するに1階丸ごと物置。きっと、おじいちゃんがあの世に行くまであのままなんだろう。

居間の隣はおじいちゃんの部屋だ。趣味で描いている日本画の道具が雑多に散らばっている。真ん中にある木の机にはいろんな顔料がこびりついていて汚い。ここもなぜかお線香の匂いがする。わたしの肖像画を描いてやろう、という話があったらしいけど、結局見せてくれなかった。きっと完成しなかったんだと思う。わたしの家には、おじいちゃんが描いたフルーツやお花の絵が飾ってある。上手い下手は知らない。きっと下手だと思う。

その部屋の障子を開けるとぎしぎし鳴る縁側があって、そこから庭へ出られる。狭い庭。猫の額ほどの部屋。縦は家の長さと同じだけど、幅は3mほどしかない。狭い地面を囲むように椿とか山茶花とか南天

とか生えていて、端っこに信楽焼の狸がでんと腰掛けている。そいつの傍らに、植木屋さんが持ってきた大降りの木々に見下ろされて、一本の若木が場違いそうに生えている。

一庭の林檎の実をもうはいけないよ。

一あれは、お祖母様の忘れ形見だからね。

去年ここに来た時、おじいちゃんにそう言われた。

変なことを言うなあ、と思った。

だってあれは、まだ植えてから3年経ったか4年たったか、そんな木だ。テレビで見るリンゴ農家の木は、どれも桜公園の木のように大きく育っている。あんな若木に林檎が実るわけがない。だけど、黙っていた。おじいちゃんは耳が遠いし、声も聞き取りづらい。ちゃんと会話するのは、しんどい。

おばあちゃんはずっと昔に死んでいる。私が生まれるのよりも前に。父さんがまだ学生だった頃に。居間の欄間の遺影の中にいるはずなんだけど、着物姿の若い女性は何人かいるのでどれかわからない。そんな理由で、わたしはずっと片祖母無し。だからどうということもない。

なので、あの林檎の若木がおばあちゃんの忘れ形見というのもおかしい。そんな昔に亡くなった人の形見なら、当然その形見も古くなきゃいけないはずだ。あんな新参者の木、お祖母ちゃんとは何の関り合いもない。

おじいちゃんは寂しい人なんだなと思ったら、なぜか胸が傷んだ。

(…寒い)

大晦日を明日に控えて、わたしはまたおじいちゃんの家に来て来られた。

友達との架空の約束を盾にずいぶん駄々をこねてみたけれど、来年は受験勉強でそれどころじゃないでしょうと言われたのに加えて、

一おじいちゃんもそう長くないんだから。

そんなことを言われたら、折れざるを得ない。

つかえつかえの挨拶を済ませると、おじいちゃんの相手は両親に任せて、わたしはとっとと庭に退散する。

やることもないので、花壇の枠内へ侵入しようとしている雑草を2、3本引っこ抜いて、その辺に捨てる。それほど意味もないことなのですぐにやめてしまう。庭の奥から信楽焼がじっとこっちを見ている。

(…いつ見ても、可愛くない)

ぐりぐり目玉が大きすぎて気持ち悪いし、ぬめぬめした感じの塗りも嫌い。

(もうちょっと愛嬌ある顔立ちできないの?)

そうつぶやきながら、陶器の顔をつつく。ちょっと強くつつきすぎた。首はカラリともげて、壁際の金木犀の葉下の薄暗がりへ、朝の霜が溶けてぐちゅぐちゅしている泥の中へ落ちた。

「……………」

しまった。

これは…どうしたものか。

でも、湿気た泥の中へ手を突っ込むのもごめんだ。

『…悪い子だね。』

不意に、頭上から叱られた。

誓ってもいい。誰もいない庭の片隅で、突然声がしたのだ。

『こんなに行儀の悪い子どもは見たことがない』

女の人の声だ。

線香臭い畳だらけのこの家では聞いたこともない、張りのある、厳しい女の人の声。

おそろおそろ、見上げる。

頭上には…地面にしゃがみこんでいるわたしの頭上へ、樹齢3、4年くらいの林檎の若木が、骨ばった枝をピンと伸ばしている。葉はもうみんな落ちて、黒く染まった枝に点々と白いものがある。それがわたしをじっと睨む顔のようにも見える。

『狸さんに謝りなさい』

ぴしゃりと一喝。

それでわたしの我慢も限界。

ぱっと飛び上がり、庭を数歩で駆け抜け、障子を押し開けて祖父の部屋へ逃げ込む。

そこはよく知っている、埃っぽい祖父の部屋だった。机の上には新聞紙がひかれ、赤いつやつやした林檎が2つと蜜柑が1つ。林檎にはバーコード付きのラベルが貼りっぱなしだ。そしてそれらをデッサン途中のスケッチブックが開いていた。あれは確か、いところが祖父にあげたものだ。

居間からはほのかに抹茶の香りが漂ってくる。それを胸いっぱい吸い込みながら、私は一もう二度と、ここには来たくないなと思った。

《弘法は筆を選ばず賞》

大都会

碧

初霜の降りた日、家を出た。こんな田舎にはうんざりだったのだ。いつまでも時代遅れの価値観に染まり、世の中の中心から取り残されていることもわからずに、うわさと干渉しかすることのない老いたじじいばがいなか臭い物差しを押し付けてくる、こんな田舎にはうんざりだったのだ。たしかに俺は県で一番の高校には入れなかった。だがそれでなぜ、親戚の集まりがあるたびに、できの悪い孫で・・・などと言われなければならない？ ようし、そんなら、進学校のやつらが将来何のやくに立つとも知れない数式を丸暗記している間に、俺は東京で一旗あげてやる！ と、そんな具合で俺は豚の貯金箱を叩き割った。首から2万円がでてきた。これでどうにかなるだろう。俺は林檎のマークのついた携帯電話を握りしめて、特急にのりこむ。新宿駅には3時間ほどで辿り着いた。すごい人だった。駅のホームがいっぱいあった。改札もやたらたくさんある。意味がわからない。出口の矢印ありすぎ。出口ひとつにしとけよややこしい。なんとか建物の外に出る。三次元だ。なんで道路が幾重にも折り重なっているんだ。道路の反対側に行きたいだけなのにどこをどう進めばいいのかわからない。次元が違うのだ。呆然と立ち尽くしていると、後ろから歩いてきた人にぶつかった。

「あ、あ、あ、え、えらいすんまへん・・・」

そう言うと、その人はあからさまな舌打ちをした。

「気を付けてくださいよ」

どうみても60にはなっていそうなそのご婦人はきれいな標準語を話した。こんな歳で、まったく訛ってないなんてすげーな。そこまで考えてから、東京のじじいばばは方言なんか話すわけないということに気付いて戦慄した。ここは魔界都市東京なんや・・・！

俺は東京弁アレルギーを起こして死んだ。

アーアァァー果てしないいいー

寒い荒野と発掘と

うわあああああ

霜で凍った土を踏みしめながら、真中は煙草を吸っていた。ネックウォーマーを鼻が隠れるまでずり挙げていて、遠くから見る姿は少しテロリストの様だ。真中は煙草を吸いながら機械が地面を掘削していく様子を眺めている。こんな真冬に首長竜の化石の発掘をするなんて、少しおかしいかもしれないが、こんなことを生業にしている真中にとっては仕方がない。

今では、化石の発掘なんてものはとんと廃れてしまった。それでも真中はたとえ一人であっても地面を掘り続ける。子供のころのロマンを忘れられないのか。

真冬の発掘作業は孤独で体力のいる作業だったが、真中はそんな真冬のピンと張りつめた空気が好きだった。

一人で煙草でもふかしながら採掘機械を動かしたり、刷毛で掘り出した石の砂を払うのは本当に探検家の様で、真中の子ども心を動かした。

「なかなか出ないですね」

真中が機械を眺めていると、助手の植草が話かけた。

「ああ、根気のいる作業だ」

「寒いですね」

「そうだな。コーヒーでも入れてきてくれないか」

真中がそういうと、植草は律儀に返事をして、停めてあるジープの後部ドアを開け、用意された機材でコーヒーを作り出した。

我ながら、優秀な部下を見つけたな。真中はそんな風に思って遠くの景色を見つめた。

先ほど植草にも言われたのだが、なかなか化石なんてものは発掘されない。地層の重なりは明らかに古く、古代このあたり一帯は海ではなかったのかということが推理される。

それならば魚の化石、あわよくば首長竜の化石などが発掘されても良いようなものなのだが、なかなか発掘されない。

気の遠くなる作業だ。

今度はノミと金槌を手に取り、真中は土を削りだした。いっそのことダイナマイトで爆破したいような気もしたが、真中は火薬の扱いに慣れていなかった。

「コーヒー入りましたよー」

植草がステンレスのマグカップを二つ持ってこちらに歩いてきた。

「ああ、ありがとう」

まだ作業に取り掛かったばかりであったが、いったんその手を休め、休憩をすることにした。

「あ、そういえば、ジープに林檎が乗っていたかもしれないな。すまないがとってきてくれないか」

「はいー」

（も一人使いが荒いんだから）

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、なんでもありませんー」

「すまないな」

「いいですよー」

そう言って植草は再びジープの方へ行き、バックに入った林檎を持ってきた。

爪楊枝を二本取り出し、植草と二人で食べた。少し冷たかったが、水分と糖분을吸収できるし、何より林檎はおいしかった。

「あれ、機械止まってませんか？」

「あ、そうだな」

近くへ行ってみると、確かに機械は停まっていた。地中に杭を打ち、杭の振動で土や砂と化石を剥離させるという、真中お手製の発掘機械であったが、いまいち役に立っていなかった。

「う～む、燃料切れかな。とりあえずこの辺もう少し掘ってみるか」

「そうですね～」

そうやって二人はそのあたり一帯を掘り始めた。最初はシャベルを使っていたが、次第にノミや刷毛を使って、慎重に・・・。

寒さで手がかじかみそうになるが、そんなことは気にしていられなかった。少し掘り出すと、層状になった石が出てきたが、それが具体的に何の化石であるかはその場では判別できなかった。

見ると、魚の骨のような模様をしているのだが・・・。

「なんか出ましたね」

「出たな」

予想よりもいささか小さい成果に、二人はあまり驚くことができなかった。

「これ、なんですかね」

「おそらく魚じゃないかと・・・」

「まあ、見るからに」

「つまり・・・？」

「つまり・・・」

真中と植草は顔を合わせた。何しろ真中の仮説が当たっていたからだ。

「ここは昔海だった可能性が高いな」

「まあ、そうですね」

「そうだな」

植草はあまり喜んでいいのかどうなのか分からなかった。誰かがここに魚を捨てた可能性も無きにしも有らず。

発掘成果：魚の化石

いささか出来すぎた話かもしれないが真中は内心喜んでいた。昔からへっぽこと呼ばれていた真中であ

るが、自分の仮説に有利な証拠が出てきたのだから。

それでも、首長竜には程遠い。がんばれ真中。へっぽこ真中。

投稿時刻 : 2013.11.17 01:45

総文字数 : 970 字

獲得☆ 3.545

※制限時間後に投稿

間に合わなかった。

秋吉君

嫌な夢だった。

リンゴ畑のあちこちに、無数の首が落ち散らばっていた。

天を仰いでいたり、地面に埋もれていたり。バラバラの方向へ顔を向けて、一様に首は目は閉じていた。

俺は首を避けながら、木々の合間を進む。

土に降りた霜を踏むたび、足の裏から感触が伝わってくる。

呼吸が荒くなる。俺は白い肌を思う。あの木の向こうにあるぬくもり。丸い乳房と甘い吐息。

下腹部がもどかしい。

俺は首を避けながら、足早に進む。

黒い幹の向こうに、マフラーの切れ端が見える。

「美由紀！」

叫ぶが声は出ない。俺は走り出す。全裸だった。固く尖った肉が屹立し寒気に突き刺さる。

思うように足が進まなくて、あっと思った瞬間、白髪頭の首に躓いた。

「この土地から出るな！」

地面から咆哮が響き、無数に落ち散らばった首が一斉に目を見開いて、俺をにらみつけた。

「ねえ、ほんとにそれでいいの？」

「ああ。もう決めたことだから」

「ふうん……じゃあ、離れ離れになっちゃうね」

美由紀はマフラーで口元を隠した。

「お前こそ、本当に東京の大学に行くのか？」

「私、こんな田舎で一生過ごすなんてやだから」

高校からの帰り、リンゴ畑へと続く細道は薄暗く、人の気配はない。俺は夢を思い出していた。

「先祖代々の畑なんだ。知ってるだろ、農園を継ぐのは俺しかいない」

「私のことはどうでもいいんだね」

「そうじゃない、遠距離だって、続けられるだろう……」

「ムリだよ、そんなの」

陽が傾くにつれ影は濃くなり、木々の根本から首が生えてくる。

俺は制服のスカートから生える白い太ももに目をやる。

「俺、失いたくないんだよ」

美由紀は答えず、足を早める。

リンゴ畑のあちこちに、首が落ち散らばっている。

首はバラバラの方向へ顔を向けて、目を閉じている。

呼吸が荒くなる。美由紀が足を速める。マフラーの隙間から煙のように白い息が吐き出される。俺は追う。

道は更に細まり、畑との境目が消える。

足元には無数の首が落ちている。

「美由紀！」

下腹部から咆哮が響く。いつのまにか俺は服を脱ぎ捨て、全力で逃げる女を追っている。

首を蹴飛ばし踏みつけ、俺は追い、肉体は逃げる。

「お前は逃げられない」首が吠える。「お前の血は縛られている。逃がすわけにはいかない」

首の目が開かれると、黒々とした枝に果実が実る。

月明かりが真っ赤な実を照らしたとき、無数の俺の首が、女の肉に噛みつくのが見えた

終わりに

第 11 回てきすとぼい杯、お楽しみいただきましたでしょうか。

開催前にお題を部分公開する、という形式は、今回が初の試みとなりましたが、ある程度作品の構成を準備して参加された方、やはりぶっつけ本番で参加された方など、執筆時間制限に対する対処方法にも、作風同様に作者の個性が現れましたようで、大変に興味深い回となったように思います。

作品の長さを見ましても、二千、三千字超の重厚な作品がやはり増えましたものの、千字前後、千字以下にすっきりまとめられた作品もほぼ同数あり、そういった意味でも、作品ごと、作者ごとの個性が明快に押し出された回だったかと思います。作品をご覧になっては、いかがでしたでしょうか。

今回、審査の途中経過は非表示（投票人数のみ公開）とさせていただきますでしたが、結果、2～4 位が同票、大賞も内訳を見ますと僅か☆1 票差での勝利という、大接戦となりました。

――最後になりますが、今回も非常に力のこもった、魅力的な作品をお寄せくださった作者の皆さま、投票・感想・チャット会にご参加くださった皆さま、そして事前公開の二題をご考案くださった碧さんに、この場を借りてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯は、引き続き毎月中旬に定期開催の予定でおります。
お時間ございましたらまたぜひ、どうぞお気軽にご参加くださいませ。

2013 年 12 月 14 日
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、本日 2013 年 12 月 14 日 (土) 開催の予定です。



作品集電子書籍を
Puboolにて頒布中。

言葉の茂る 樹が育つ。



概ね実話です

作者さんの作品解説
聞きたいですね

蜜柑の匂いが
してくるようですね

若干テーマの
ぶれのようなものを
感じました

恋愛系の作品が
多かった印象

ほのかなえろすを
感じました

ラノベタッチな
感じで軽快で
みやすい

この世界観で
300枚くらい
書いて下さい

競作・共作
テキスト創作サイト

できすとぽい
text-poi.net

前衛的ですね。
私も結構こういうの
好きです

読んでいて時々、
すごく言葉が刺さったり、
強く共感してしまったり

よくあるパターン
なだけで
「ベタだなあ」と
感じさせない筆力

読んで
ドキドキ
しました……

このお題消化法は
正直やられたーと
思いました

こういうのこそ、
Kindleで出版したら
いいのに

予想外の結末に、
「ええっ!？」って
声出ちゃいました

適度な緩急、
リズム感があって
とても良かった

なんか直すと他の
ところのバランスまで
崩れちゃうような

できすとぽいは、競作や共作を支援する
テキスト創作サイトです。一人ひとりのウエブ
作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、
感想やアドバイス、採点などをかわしながら、
よりよい作品を創ることを目指しています。
作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやり
とりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイ
トにあなたも参加して、一緒に創っていきま
せんか?
いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集
〈第11回〉

<http://p.booklog.jp/book/80367>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80367>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80367>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



できすとぼい杯